

看護のアジェンダ

井部俊子
株式会社井部看護管理研究所
聖路加国際大学名誉教授

看護・医療界の“いま”を見つめ直し、読み解き、未来に向けたアジェンダ(検討課題)を提示します。
〈第221回〉

なぜ「退屈なので退職」するのか

10 数年、共に仕事をした元同僚が退職するというので“面接”した(長く管理をしていたせいで、私にはものごとの真相をはっきり知りたいというクセがある)。退職の理由は何かという私の問いに、すでに十分考慮してきたという彼女の答えは「退屈」であった。

退職者との面接は立場上数多くしてきたが、仕事が負担であるとか忙しくてやっていけないなど、いわゆる過剰説が一般的であった私にとって、仕事が退屈だから辞めるという理由そのものが新鮮だった。いや、仕事が退屈だからというよりも、職場の雰囲気退屈だからといったほうが正確かもしれない。やることはあり、皆、黙々と仕事をしているし仲が悪いわけではないが退屈なのであると彼女は付け加えた。

彼女の話聞きながら、ある本のタイトルを思い出した。それは『暇と退屈の倫理学』(國分功一郎著、朝日出版社、2011年)である。自宅の本棚から取り出して表紙をめくると、購入した日付があった、「2013.8.12」と記されている。およそ10年前に私は「暇と退屈」に惹かれて読んでいたのだ(しかも最近この本が文庫本となって、書店に並び人気だという)。しかし、当時は暇と退屈には無縁の生活を送っていた私には、面白いタイトルの本だなという印象しか残らず、その後、暇と退屈について考察することはなかった。

10年が経過して、自分の目の前に現れた、その仕事ぶりをよく知っている有能な同僚が、私の本棚にあるタイトルに通ずる理由で退職を決断したということに心が動いた。

ハイデッガーの退屈論

國分が前述の書で、暇と退屈に関するいくつかの学説を紹介している(あらためて読み直すと興味深い)。本稿では、「退屈論の最高峰」であるハイデッガーの退屈論『形而上学の根本諸概念』に関する著者の解説を取り上げたい。

ハイデッガーは、「退屈はだれもが知っていると同時に、だれもよく知らない現象」であるので「こういったものを分析することは実に厄介である」と述べた上で、退屈を二つに分けて考えることを提案する。一つは「何かによって退屈させられること」。もう一つは「何かに際して退屈すること」。前者を退屈の第一形式、後者を退屈の第二形式と呼ぶ。

第一形式は受動形である(「退屈させられる」)。これははっきりと退屈なものがある、それが人を退屈という

気分のなかに引きずり込んでいるということである。第二形式では、何か特定の退屈なものによって退屈させられるのではない。何かに立ち会っているとき、よくわからないのだが自分が退屈してしまうのである。いわば退屈が周囲を覆い尽くしてしまうような感じであり、そのなかで人が退屈するのだという。

ハイデッガーは退屈の第一形式を説明する事例として、ある片田舎の小さなローカル線の、次の列車が4時間後に来るという駅で待つという状況を記している。退屈しているときに、私たちが退屈を押さえ込もうとして求めるのは気晴らしである。何度も繰り返し時計を見てしまうのは、現在の時刻を確認したいのではなく、目の前に現れている退屈を相手に、あとどれだけ気晴らしを続けなければならないのかを確認したいからである。退屈している私たちは、ぐずついている時間によって引きとめられている。ぐずつく時間による〈引きとめ〉は退屈の第一形式を構成する要素である。

第二形式は、「何かに際して、何か立ち会いつつ、なんとなく、なぜか、いつのまにか、それと知らずに退屈している」。第一形式の、より深まった退屈である。ハイデッガーは、「大変楽しかったけれども退屈したパーティー」の例を記している。第二形式の場合は、「主体の置かれている状況そのものが暇つぶしであり、その状況は特定の退屈なものなどありはしない」。ここでは退屈させるものは「何だかわからない」という性格を持っている。そこにいる私自身のなかに空虚が育成してくる。外界が空虚であるのではなく、自分が空虚になるのだ。

退屈の第一形式は〈暇であり退屈している〉。第二形式は〈暇ではないが退屈している〉。さらに気晴らしと区別できない退屈であり、退屈を払いのけるはずのものが退屈になっている。

「退屈はお前に自由を教えている。だから、決断せよ」

ハイデッガーはさらに、もはや気晴らしが不可能であるような、最高度に「深い」退屈を考える。退屈の第三形式「なんとなく退屈だ」である。ここで私たちは、退屈に耳を傾けることを強制される。その声を無理矢理聞かされることで人はどうなるか。人間は自分に目を向ける。目を向けることを強制される。すると、自分が持っている可能性に気がつく。つまり、「なんと

第26回東アジア看護学研究者フォーラムを終えて

池田 真理 EAFONS 代表理事・第26回 EAFONS 大会長/
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 教授

東アジア看護学研究者フォーラム(East Asian Forum of Nursing Scholars : EAFONS)は、看護系大学の博士課程の大学院生および修了生、大学院教育に携わる教育・研究者を対象とする国際研究フォーラムである。1997年の設立当時、大学院博士課程の教育を実施していた日本を含む東アジア7カ国が理事国となり、学術集會を毎年開催してきた。近年はコロナ禍によりオンライン開催が続いていたものの、第26回大会は日本看護系大学協議会と東京大学のメンバーから構成された企画運営委員会が、1年をかけて対面開催に向けた準備を進めてきた。そしてこのたび2023年3月10~11日に、東京大学本郷キャンパスでの開催が実現し、登録者が1838人、現地参加者は1032人(約4割は海外から)と、今までにない盛況であった。

大会テーマは「未曾有の時代における看護学博士課程教育のレスポンス——持続可能なwell-beingに向けて」。世界中の人の持続可能な幸福の実現に向け、積み重ねられてきた知を大事にしながら、時代のニーズに柔軟に変化・発展し続ける看護学について、未来志向的に考える大会となった。開会式は威勢の良い和太鼓から始まり、開会挨拶では本年2月に発生したトルコ・シリア大地震、そして12年前の東日本大震災に思いを馳せて祈り、看護職としての責務を果たすべく、積極的な2日間を過ごそうと呼びかけた。基調講演には看護学研究の初学者が必ず手に取る書物、『看護研究——原理と方法(第2版)』(医学書院)の筆頭著者としても有名な Cheryl Tatano Beck 先生から、これまでの研究を振り返り、「道なき道を行く」チャレンジ精神をうかがうことができた。

メイン会場では3つのシンポジウムが開催された。1つは「地域参加型研究：ニーズマップから政策まで」。地

域のステークホルダーや市民が研究者と協働しながら、研究の計画から実施、実装まで行う研究手法が紹介された。次に「データサイエンスへの挑戦：ヘルスケアの進歩におけるデータサイエンスの役割」というテーマで、気鋭の研究者に最新の知見や世界の動向を紹介してもらった。3つ目は「看護研究における質的アプローチの探索」だ。看護学の発展のためには実証研究だけではなく、多様な研究疑問とニーズに応える必要がある。同シンポジウムでは新たな質的アプローチの開発の意義とその実践が紹介された。また今回は優秀賞候補および最優秀賞候補の演題の口演発表をメイン会場で行い、発表だけにとどまらず、質疑応答を通して双方向で研究への理解を深めていくセッションも繰り広げられた。

学会 Web サイトで参加を募った Student Round Table では、どこでも誰とでも付箋を使ったオンライン会議ができるツールを用いて、会期前から活発に盛り上がった。会期中にも研究の悩みややりがいについて対面で討議する場が設けられ、18カ国50人以上が参加した。大学院生の頃から海外の仲間と交流し、実践者、研究者となった後も EAFONS がプラットフォームとなって協働の促進につながることは、まさにめざすところである。EAFONS 代表理事として、持続可能な看護学の発展のためにもこの活動を盛り上げていきたいと思う。大会の様子は EAFONS のオフィシャル Web サイト (<https://bit.ly/3VOObDvs>) 内で見ることができる。

●いけだ・まり氏/東大医学部保健学科を卒業後、花王株式会社に入社。その後、厚労省で看護行政などに従事する。筑波大学院教育学修士、東大大学院保健学博士。2021年より東大大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻教授、同年1月からEAFONS代表理事。

なく退屈だ」と感じている私たちは、あらゆる可能性を拒絶されている。だが、むしろあらゆる可能性を拒絶されているが故に、自らがある可能性に目を向けるよう仕向けられている。この第三形式からこそ、他の二つの形式が発生するのだと説明される。

退屈の第三形式「なんとなく退屈だ」のなかで、人間は自分の可能性を示される。その可能性とは何なのか。ハイデッガーは「自由」だと答える。言い換えると、私たちは退屈する。自由であるが故に退屈する。退屈するということは自由であるということだ。「退屈する人間には自由があるのだから、決断によってその自由を発揮せよ」と言っているのである。退屈はお前に自由を

教えている。だから、決断せよ——これがハイデッガーの結論である。

もっとも、著者の國分は「ハイデッガーの結論には受け入れ難いものがある」とした上で、「彼の退屈の分析は極めて豊かなものである」とも評している。

*

なぜ、退屈が退職の理由となるのか。退屈にはどのような意味があるのかを、(國分の解説を通してではあるが)ハイデッガーの退屈論によって学ぶことができた。退屈だから辞めるという、もしかすると本人が気がついていない真の理由に「退屈」が潜んでいるかもしれないという仮説は、私を沸き立たせる。そこには自由があり、決断せよというメッセージがあるというのである。

大きな変更点がありますか?—「はい」プラマニユはいつも現場の変化とともに

感染症プラチナマニュアル Ver.8 2023-2024

▶感染症診療に必要なかつ不可欠な内容をハンディサイズに収載。必要な情報のみ絞ってまとめ、臨床における迷いを払拭する。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の記述を大幅に刷新。新規ガイドライン(敗血症など)、臨床に直結する新旧の主要論文約150本の情報を更新するなど、Dr.岡+新たな執筆協力者27名の布陣による大改訂。全体で約40ページ増。既刊『ASM臨床微生物学プラチナレファランズ』と『微生物プラチナアトラス』とリンク継続。拡大版(Grande)も同時発売。若手・ベテラン問わず、医師・ナース・コメディカルのみならず。

著: 岡 秀昭 埼玉医科大学教授/総合医療センター病院長補佐/総合診療内科運営責任者/感染症科・感染制御科運営責任者

定価2,530円(本体2,300円+税10%)
三五変 頁636 図9 2023年
ISBN978-4-8157-3073-4

TEL.(03)5804-6051 http://www.medsci.co.jp
113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 FAX.(03)5804-6055 Eメール info@medsci.co.jp

実はそこまで難しくない! エコーへの苦手意識を克服できる本

フィジカルアセスメントに活かす 看護のための初めてのエコー

ポケットエコーの登場で、病棟や在宅で看護師の超音波機器(エコー)の活用場面が広がる兆しはあるが、まだ十分ではない。触れる機会の少なさや、技術への自信のなさなどが理由だ。しかし、意外と簡単に画像を描出し、根拠のあるケアが提供できる部位も多く、業務の効率化を図ることができる。そこで、初めて超音波機器に触れる看護師に向けて、分かりやすい表現を心掛けた。本書によって、超音波機器の活用場面と可能性が広がる。

編集 藤井徹也 野々山孝志

エコーへの苦手意識を克服できる本

定価2,530円(本体2,300円+税10%)
ISBN978-4-260-05011-1

医学書院